

オレンジクロス

～ 理想の地域包括ケアシステム創造に向けて ～

春号

2024 SPRING

VOL. 16

巻頭言

株式会社ノバケア 代表取締役社長
オレンジクロス 理事
岡本 茂雄氏

現地レポート

地域のノリシロを大きくする“働きもん”の「ものがたり」
一般社団法人 TeamNorishiro 理事
西村 俊昭氏

特別寄稿

東京大学 Global Nursing Research Center による
目白台GNRC オープンスペースでの地域活動の構想：
しあわせ社会実現プロジェクト

東京大学大学院医学系研究科 Global Nursing Research Center
教授 山本 則子氏 / 特任研究員 稲垣 安沙氏

財団レポート

熟達化に経験が果たす役割とその拡張
静岡大学
講師 石川 翔吾氏 / 楠田 (小山田) 理佳氏

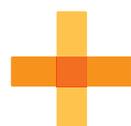
第9回オレンジクロスシンポジウム

コンパッションに支えられるまちを考える

2023年第2回オレンジクロスセミナー（アラン・ケレハー氏特別セミナー）

WHO 健康都市とコンパッションコミュニティの台頭
～パブリックヘルスに求められる今後の変革～

第10回看護・介護エピソードコンテスト応募要項



一般財団法人

オレンジクロス

巻頭言

オレンジクロスの新たな飛躍へ



初代理事長を務めました岡本でございます。設立者である村上美晴氏の地域介護分野に恩返ししたいとの意思を受け、「自らが研究をし、医療・看護・介護・予防を統合した新たな包括ケアを創造し、世に普及することを目指す財団」として、オレンジクロスを設計、設立しました。設立日の2014年7月1日には、後述します Buurtzorg との実証研究のためオランダにおり、西山前事務局長には初日から守りの要をお願いしたことは、オレンジクロスのチームが世界に貢献することの証左ではないかと考えています。

スタート時の研究としては、田中滋先生（現埼玉県立大学理事長／慶應義塾大学名誉教授）の指導を得て地域包括ケアのコアとなるソーシャル・コミュニティ・ナーシングの研究、飯島勝矢先生の指導を得て家庭医療の研究、川越雅弘先生の指導を得てケアマネジメントに関する事例検討会、そして世界最先端の訪問看護をオランダで展開している Buurtzorg と堀田聰子先生の指導を得て地域包括ケアステーションの実際の開発と実証などをスタートしました。また、啓発部門としては今に続く看護・介護エピソードコンテストを開始しました。

本財団の設立目論見書作成においては、辻哲夫先生（当時、東京大学客員教授）に、実際に赤ペン先生のようなことまでお願いし、ようやく地域包括ケアの発明に貢献できる事業計画が完成したことも思い出されます。

設立パーティーにおいては、研究者の方々、地域包括ケアの実践者、行政者に加え、当時の農林水産大臣である林芳正先生もご参加、ご祝辞を頂戴しました。まさに、地域包括ケアは地域づくりの根幹であることの証左ともなります。また、地域包括ケアステーションの開発では、Buurtzorg との実証の調印は、オランダ国王アレクサンダー陛下の前に行いました。国王陛下からは、ご自分が介護状態になってもこのシステムがあれば安心だとのお言葉を頂戴しました（Buurtzorg 設立者の Jos さんが）。

2016年には、理事長を村上佑順氏に託し、理事として支援する側となりました。自分の中核の仕事としては、ADL や認知能力の維持・改善、あるいは地域特徴に応じた自治体の政策策定に資する AI の開発会社として、ノバケアを仲間と設立しました。地域包括ケアは、大量データ処理が可能な時代に入り、AI もまた生成型 AI や AGI の時代に入りつつあります。すでに、ノバケアでは科学的介護情報システム（LIFE）に基づく、介護リハビリテーション AI を完成しました。人口減少とさらなる超高齢社会の時代において、このような最先端技術を活用した地域包括ケア像を作り上げることは、我が国のみならず人類の急務です。

ノバケアにおいては最先端技術のさらなる進化を実現し、オレンジクロスにおいては理事として、最先端技術を仕組みのひとつに組み込んだ、新たな進化型地域包括ケアの創造と社会への提案を進めていきたいと考えております。

現理事長である村上佑順氏の下、オレンジクロスはプレゼンスの拡大を順調に進めて参りました。しかし、ここでよしとせず、最先端技術活用型の新たな地域包括ケアを創造すべく、オレンジクロスのさらなる飛躍に貢献したいと考えます。

株式会社ノバケア 代表取締役社長
オレンジクロス 理事

岡本 茂雄

地域のノリシロを大きくする“働きもん”の「ものがたり」

一般社団法人 TeamNorishiro 理事 | 西村 俊昭*

1. ノリシロ (Norishiro) って?

はじめに私たちの団体について Q&A 方式で紹介します。

Q Norishiro (ノリシロ) ってどういう意味ですか?

A Norishiro (ノリシロ) とは、人と人。現場と現場。時間と時間などが、いつでも近くにあって、いつでも重ねられる存在。地域の中で、この重ねられる存在が点在するほど、地域の力(許す・認める・握り合う)が太ります。また、Norishiro (ノリシロ) とは、これから重なる人や場所も意味します。

Q どんな活動をしていますか?

A 私たちは、働く経験が少ない若者を地域の人財と捉え、地域の未利用資源を活用した継続的な働く場や集う場を提供しています。地域の中に所属を持ち、色んな経験ができる時間の保証を通して、自分らしい働き方、暮らし方を見つけてもらうことに取り組んでいます。また、これらの活動を通して若者たちの応援団を増やしています。

Q どんな若者を応援していますか?

A 学校生活が合わなかった、働く機会に出会えなかった等、何かうまく行けなさを持つ若者たち。この地域で生きることの大事さを「働くこと」を通して応援しています。私たちは、そんな彼らを、愛を持って「働きもん」と呼んでいます。

Q 活動していく中で大切にしていることは何ですか?

A 日々の活動の中で生まれる彼らが働くことを通して、気付いたり考えたりして見えたコト・・・そんな一人ひとりの人生の「ものがたり」を大切にしています。この「ものがたり」のひとつを毎年、若者たちを応援してくださる応援団に発信しています。

Q この活動を通して見えたことはありますか?

A 過疎化、少子化、高齢化などの地域が抱える課題解決の共通言語が、若者たちの毎日にあると感じています。「独り勝ちせず、みんなで重なり、繋がる地域づくり」です。

Q ビジョンは?

A 生きづらさを抱える人は課題でなく、地域の資源(宝もん)と捉え、地域に根差した働く場や集う場を創造することに

よって、地域のノリシロを大きくして、人口急減・超高齢化する地域社会を変革します。

Q ミッションは?

A 年齢、経済条件、制度などに関係なく、生きづらさを抱える人すべてを対象に、地域に根差した働く場や集う場を企画・運営して、命を守り、地域で働き暮らしていく力をオーダーメイドで育みます。また彼ら彼女らの応援団を増やします。

2. ノリシロのあゆみ (連携団体含む)

次に、連携団体含むノリシロのあゆみを紹介します。

- 2006年 ● 4月 東近江圏域働き・暮らし応援センター“Tekito-”開設
—「働く」ことと「暮らす」ことを一体的にサポートする専門機関—
- 2007年 ● TeamKonQ(チーム困救)設立
—草刈りや農作業など地域の困りごとを請負、働く場の創出—
- 2010年 ● 滋賀県東近江市緑の分権改革推進事業
薪プロジェクト
—雑木林を利用するための市民協働の新活用の可能性調査—
—東近江市、薪遊庭、Tekito-、農楽の連携による調査体制—
- 2012年 ● 4月 薪遊庭において働きもんによる薪割スタート
- 2014年 ● 3月 TEAM CHAKKA 設立
—リサイクル着火材事業による働く場の創出—
- 2020年 ● 4月 一般社団法人 Team Norishiro 設立
—薪遊庭の薪事業と TEAM CHAKKA の事業統合—
- 2021年 ● 5月 株式会社 BASYO 設立 —砂栽培事業—
6月 大萩基地取得
- 2022年 ● 3月 うんとこしょ(砂栽培ハウス)、
よっこらしょ(出荷場) 整備

3. メンバー

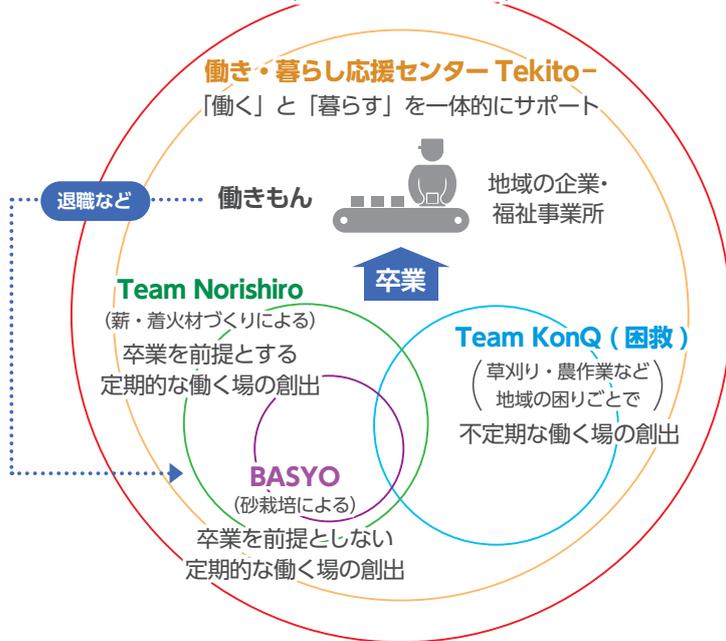
専門機関、民間企業、行政の有志によるメンバー構成になっています。

理事長	村山英志	株式会社イー・ジェイ・ファクトリー(薪遊庭) 代表取締役
理事	野々村光子	東近江圏域働き・暮らし応援センター “Tekito-” センター長 支援センター太陽 センター長
	國領俊紀	東近江市
監事	辻村達久	TeamKonQ(チーム困救)代表
事務局長	西村俊昭	株式会社 BASYO 代表取締役 株式会社農楽 代表取締役 コンサルタント

4. 関係団体との相関

有志メンバーの所属する関係団体と相関は下図のとおりです。年齢、経済条件、福祉制度などに関係なく、生きづらさを抱える人すべてを対象にしています。私たちは、東近江圏域働き・暮らし応援センター、TeamKonQ（困救）と連携して、支援の入口として相談でなく、継続的な働くステージ（中間的就労の場）や自立するための暮らしの場を提供しています。また、BASYOと連携して、砂栽培などの農業で、地域企業で退職した高齢の働きもんなどが継続的に働くステージを提供しています。

働きもんの応援団 （住民・企業・行政など）



5. 薪プロジェクト

薪プロジェクトは、かつて薪炭林として利用されていたナラ等の雑木を薪にして、薪ストーブ等の燃料として活用して、自然エネルギー利用促進と里山保全を目指しています。

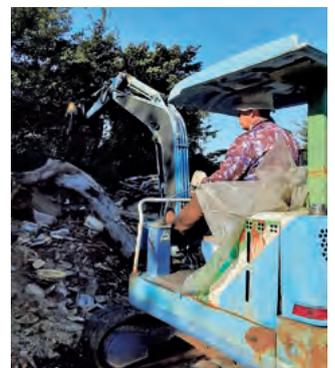
■ 2022年度活動実績

薪割	毎週水・金曜日	8:30～16:30	91日開所
	参加人数	5名	延べ263名(平均2.8人/日)
	体験のみ	2名	
地域企業・福祉事業所に卒業	2名		
地域企業への見学・実習	1名		

■ 2022年度働きもんの“ものがたり”

薪を割る～大事な音の中～

春夏秋冬。いつも外で薪を割る。
“キー・・・バリバリバリバリー”
今日も大きな音がする。油圧式の薪割り機。
デッキカ原木が薪になって行く瞬間の大事な音。
声が必要な音にかき消される。
たぶん、みんなにとっては「うるさい音」。
独り言を言ってしまう僕にとってはサイコーに安心できる音のある現場。
機械の操作が上手い先輩がこの現場を卒業した。
会社ってどんどこなんやろう・・・
心配はある。けど、安心できる音もある。
僕にとって心地よい音のある会社を見つけたい・・・
そんな気持ちが薪割りの音を聞きながら溢れて来る。
今年も暑い夏が来る。



6. 着火プロジェクト

着火プロジェクトは、利用用途のない廃くん炭（米のもみ殻を炭化したもの）や木くずと、使用済のろうそくやキャンドルを、バーベキュー・たき火や薪ストーブなどの火付けに使用する着火材として活用して、未利用資源のリサイクルを促進しています。

■ 2022年度活動実績

着火材生産	毎週月・木曜日	9:00～12:00	89日開所
	参加人数	9名	延べ380名(平均4.2人/日)
着火材袋・箱詰め	毎週水・金曜日	9:00～12:00	94日開所
	参加人数	18名	延べ268名(平均2.8人/日)
地域企業・福祉事業所に卒業			1名
地域企業への見学・実習			8名

■ 2022年度働きものの“ものがたり”

くすぶってなんかいられへん～誰かと誰かの間に立つ～

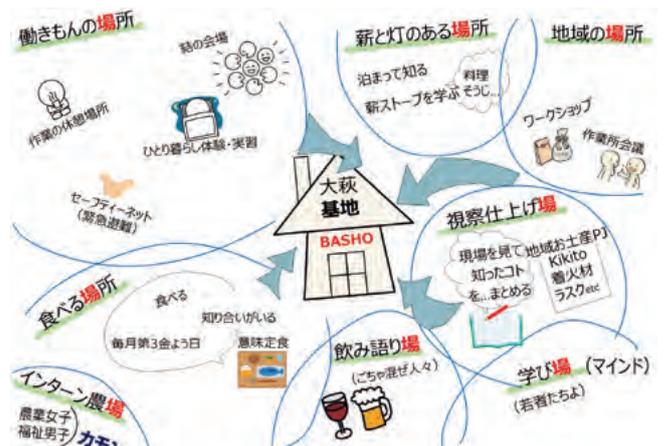
毎週必ずポストイングをこなす日々。
 決まった仕事はばっちりこなす。しっかり一人でこなす。
 家で過ごすのが大好きで、趣味はラジオとアニメとゲーム。
 そして夜明けにこっそりペンを走らせ、日記を書く。そんな日課を一人で楽しむ。
 誘われて、家族以外の人に会ってきた。
 緊張する私。
 「作業手伝ってくれへんか？」の言葉に思わず「良いですよ」と返事をする。
 手伝うのは黒い四角の袋入れ。
 手伝いに行った場所には知らん人が居て、緊張で体がいっぱいになった。
 「良いですよ」何で言うたんやろうと自分に聴く。
 袋に入れる・タグを切る・タグを付ける…隣の人から預かって、前の人に手渡す。
 あれ？ちょっといい感じ。
 緊張が少し小さくなった時。黒い四角を作る作業に誘われた。
 電車で揺られ、人里離れたとこまで通う。ちょっとしたおでかけ気分。
 あれ？いい感じ。
 袋に入れた黒い四角はまだ四角になってない。型にはめて、重さを計って四角にする。
 隣の人から預かって、前の人に手渡す。立ちっぱなしなのに楽しい時間。
 失敗しても間違ってもやり直したら大丈夫。そんなコトを知った時間。一人で何でもやれてきた。人とやれるコトがあると分かった。
 隣の人から預かる。黒い四角のボタンを受け取るコトが嬉しい気持ちになってきた。
 働かってこんな気持ちと思うと、そろそろずっと働く場所に立ってみたいと思う。
 夜明けの日記は続いている。
 だから立ちっぱなしでも大丈夫。
 今日も黒い四角のボタンを受け取って、一緒に働く誰かに渡す。



薪の購入者、着火材を仕入れてくれたキャンプ場や薪ストーブ店も、働きものの応援団です。そのために、毎年、感謝の気持ちを込めて、薪・着火プロジェクトの働きものの“ものがたり”を送っています。また、着火プロジェクトは応援団を拡大するために、毎年、着火材を仕入れてくれそうなキャンプ場や薪ストーブ店などにDMとして送付しています。

7. 大萩基地（誰かの場所）

大萩基地は、大萩集落の空き家を引き継ぎ、「誰かの場所」として利用しています。



2022年度活動実績

利用目的	利用回数	利用人数
働きもんの場		
ひとり暮らしの体験・実習	9	19
セーフティーネット	5	9
作業の休憩	5	14
結の会	2	27
その他	15	34
学びの場		
若者	7	61
親	1	2
その他	5	19
視察の仕上げの場	16	90
食べる場	—	—
地域の場	14	126
飲み語る場	9	93
その他	20	122
合計	108	616



8. BASYO (砂栽培、葉牡丹など)

BASYOは、遊休農地を活用して、高齢者でも農業がしやすい高床式砂栽培による野菜づくり、葉牡丹づくり、梅栽培をしています。



2022年度働きもんの“ものがたり”

ハウスうんとこしょ／大萩基地～ていねいな仕事～

「今年は畑で採れた青梅を真っ赤な梅干しにしたいねん。」

そんな手仕事計画を相談した2022年の梅雨入り直前。

相談相手は、いくつもの仕事に挑戦して来た手先の器用な男子40歳。

「梅干しは難しいらしいですよ。出来ますかねえ。」

気遣いがバツグンな彼は自信を持たない。

ぼちぼちええ感じと思えるコトを応援団と重ねる毎日を生きる。梅干しは収穫され、塩され、漬けられ、干され、ひっくり返され、干される。

手間とていねいと気遣いが満タン。全ての作業に彼の手が入る。「田舎のばあちゃん家みたいですわ。」縁側で梅を返す彼のコトバ。どんな暮らしがちょうどええのか。自分のままで続く働きはどこにあるのか。

まだまだ考え探中。

けど、安心できる縁側と時間をかけて付き合える手仕事がある。

梅は青から赤に変わって誰かの肥やしになる。

彼も、その優しい気遣いが誰かのチカラになってるコトに気付く日が来たらええなあ。

いつもありがとう。

【引用文献】

Annual Report2022, 一般社団法人 TeamNorishiro, 2023年9月

東京大学 Global Nursing Research Center による 目白台 GNRC オープンスペースでの地域活動の構想： しあわせ社会実現プロジェクト

東京大学大学院医学系研究科 Global Nursing Research Center



教授
山本 則子



特任研究員
稲垣 安沙

東京大学大学院医学系研究科看護学分野では、文科省概算要求によりグローバルナースングリサーチセンター（Global Nursing Research Center：以下GNRC）を2017年に立ち上げ、看護学の知の創造と国内外への実装・拡大、看護学の若手研究者の育成を進めています。これまで理工学と看護学の融合をイノベティブ看護学として展開してまいりましたが、次なる展開として、文理融合型コミュニティ活動の社会実装・普及の取り組みを、東京大学目白台キャンパスに建設中の複合施設をプラットフォームとして構想しています。看護学を基盤とした人生100年時代の幸福寿命の延伸を目指す「しあわせ社会実現プロジェクト」と名付けました。今日は、このプロジェクトについてご紹介します。

日本では、超高齢多死社会に入り、病院完結型の医療から、地域完結型の医療へと方針転換が進んでいます。このため、病気や障がいがあっても、自分らしく生活が続けられることを目的に、医療・介護・福祉が一丸となって取り組む、地域包括ケアシステムの実装が進んでいます。地域包括ケアシステムを構成す

る要素として、自分の健康は自分で守ること（自助）と、お互い様の視点で、近隣住民同士で支えあうこと（互助）が注目を集めています。つまり、医療や介護の専門職からの支援を受けるだけでなく、地域住民同士での助け合い、支えあいが期待されているのです。2018年、2019年にオレンジクロス財団の助成を受けて私たちが行った研究では、既存の制度や枠組みにとらわれずに地域のニーズを拾い出し、そのニーズに対応する形で多様な機能を発揮して活動を実施している看護職 Social Community Nurses：SCNs へ、インタビューと参与観察を行いました。その結果、活動する看護師が持つ「強み」と、地域の特性及び地域が持つニーズをうまく噛み合わせ、地域住民と協働しながら地域づくりに貢献している姿が浮かび上がりました。糖尿病に関する豊富な専門知識や経験を活かして、フリーランスとして個人事務所を運営しつつ、地域の糖尿病ケアの質向上や、未受診者の発掘など、病院、クリニック、市町村、と多彩な場所での看護を展開するSCN。ホームケアクリニックが運営する訪問看護ステーション、暮らしの保健室を拠点とし、近隣住民で気になる人へのアウトリーチ活動を組み合わ

せ、地域に根ざした在宅ケアを実践する SCN などの例がありました。このように、既存の地域資源と有機的につながり、地域に根ざしたネットワークを強化していくことで、看護実践を拡大し、持続可能なものへと発展させている看護職の存在が明らかになりました。そのような研究の経験を踏まえ、私たちは、Social Community Nursing 機能を発揮し、看護職が地域住民の皆様と協働しながら地域づくりができる場所を作りたいと考え、「しあわせ社会実現プロジェクト」を構想しました。

東大目白台キャンパスに建築中の複合施設では、2階から5階までを有料老人ホームとサービス付き高齢者住宅が占め、1階には地域にサービス展開する複数の施設が入る予定です。具体的には、訪問看護ステーション、診療所、調剤薬局、リハビリ特化型デイサービス、学童保育施設、それに私たちが展開するGNRC オープンスペースの入居が予定されています。「しあわせ社会実現プロジェクト」は、GNRC オープンスペースを拠点とし、地域住民の皆様とともに活動を展開することを予定しています。具体的な活動は、地域のニーズを地域のみなさんと協働で解明しつつ実装したいと考えておりますが、現在のところ、以下にご説明する3つの柱を構想しています（図1）。

1. ケアコンピテンシー認定制度

まずケアコンピテンシー認定制度についてご説明します。地域共生社会の実現に向けて、地域で生活するあらゆる市民がケアの技術を持ち、相互に支えあう社会の構築に参画することが求められます。そこで、私たちは、そのようなケアの技術を、『自身や身近な人、コミュニティの人々の生命・健康・安寧を維持するために根拠に基づいて知識や技術を獲得し、意図的に選択し、活用することができる複合的な力。人間を尊

重する感情、コミュニケーションと動作の実践的スキル、人間の身体的・心理的・社会的な理解から構成される。』と定義し、ケアコンピテンシーと名付けました。オープンスペースでは、ケアコンピテンシーを高めるためのプログラムを研究者と市民が共に開発し、子どもから高齢者までのすべての地域住民に向けて提案していきたいと考えます。

2. 暮らしの保健室@東大目白台キャンパス

暮らしの保健室は、多機能かつ有機的な場として機能します。ある時は地域住民の憩いの場に、ある時は誰にでも開かれた、介護や医療の相談窓口。暮らしの保健室には、医療・介護・看護に詳しい専門職が常駐し、いつでも誰でも相談できるような体制を作っていくほか、温かみのある空間作りを目指して、ちょっと座ってお茶が飲めるようなテーブル、ソファ、暖かな照明や外と緩やかにつながる出入り口の設計など、建物の内装やしつらえにも工夫を凝らしていく予定です。このように、地域に住むあらゆる人々（多世代・地域・異文化）が、何か相談したいと思った時や困った時だけでなく、いつでもフラッと立ち寄りたくなるような空間を目指しています。GNRC オープンスペースでの暮らしの保健室は、臨床現場の看護職と協力して地域ニーズに基づく活動を展開する予定です。

3. 医療・介護専門職のサポート

医療・介護専門職は、地域包括ケアの観点から、昨今はいろいろな場所で連携し、共同してケアを行う機会が増えてきました。病院やクリニック、訪問看護ステーションだけでなく、保健師や地域包括支援センター職員も、地域包括ケア提供の重要な担い手です。彼らの連携活動を円滑にし、かつ相互にエンパワーしていくためにも、多職種間での交流や学び合いの場を作ることは大変貴重な機会になると考えられます。

図1 『しあわせ社会実現プロジェクト』

目白台 GNRC オープンスペースでの地域展開

だれもが気軽に集まることができる地域交流拠点化にむけた取り組み

ケアコンピテンシー 認定制度

自分も他者もケアする力を育む
ケアに関する知識と技術の
レベル認定制度の創設

子どもから高齢者までのすべての
地域住民を対象



看護研究者や熟練看護師による
ワークショップ

ワークショップの一例

- スキンケア方法
- 疾患をもつ子どもへの理解
- 子育て/家族マネジメント
- 文化的多様性(外国籍等の背景の理解)
- VRを用いた認知症を学ぶプログラム



級段位

認定

暮らしの保健室

地域住民の拠り所かつ
地域医療のつながりを育む
“場”の醸成

「相談/学び/安心/交流/連携/
育成」の場

地域住民同士、地域住民と専門職
がつながる場



医療・介護専門職の サポート

文京区ではたらく
看護職などの専門職をケアする
体制の構築

(サポートの一例)

専門職同士の顔の見える
関係づくり支援



専門職同士のピアサポート支援



看護研究者による学びの場の提供



研究の遂行



研究成果の社会実装

看護・医療・福祉のハイブリッド施設

5F
4F
2F
1F

サービス付き高齢者住宅

有料老人ホーム

GNRC
Open Space

診療所

調剤薬局

訪問看護
ステーション

リハビリ特化型
デイサービス

学童クラブ



私たちは、専門職同士の交流を図り、ピアサポート支援や看護研究者による学びの場を提供して、専門職のみなさんが楽しく、生き生きと働き続けることができる地域づくりに貢献したいと考えています。

以上の活動は、GNRC に協力する東大看護系の7分野（高齢者在宅長期ケア看護学、地域看護学、母性看護学・助産学、老年看護学・創傷看護学、看護管理学、家族看護学、精神保健・看護学）の研究者が協働で実施します。それぞれの分野は、独創性ある専門的な研究に取り組んでいます。オープンスペースでは、これらのバラエティ豊かな研究者たちによる、イベントやワークショップも企画しています。例えば、私たちの研究室である高齢者在宅長期ケア看護学分野では、地域住民向け認知症 VR 教育プログラムや、地域住民に向けた入退院に関する相談会、母性看護学分野では、出産・育児に関する講座や、乳児のスキンケア相談室などが構想されています。VR やセンシング機能、リモート看護など、ICT を駆使した先端的技術開発にも取り組んでいきます。乳幼児から高齢者まで、幅広い方をターゲットとする企画を定期的を開催することで、地域住民及び、専門職への「集いの場」を提供することにつながることを狙いとしています。

GNRC オープンスペースとともに、同じ複合施設内に訪問看護ステーションを立ち上げる予定です。同じ敷地内に開設される調剤薬局やクリニックと連携し、目白台地域の在宅ケアを展開していきたいと考えています。私たちが培ってきたエビデンスに基づいた訪問看護サービスを提供することを目指すと同時に、オープンスペースでのユニークな活動とリンクさせて、地域住民の皆様のニーズを拾い出し、それに根ざした新たなサービスやケアを先駆的に展開していきたいと思えます。

このように、目白台地域の複合施設を拠点として、小さな子どもから高齢者まで、地域住民の皆様に開かれた地域の様々な立場での交流を活性化すること、さらにはここで得た知見を世界へ発信していくことを目指して、準備に取り組んでいます。私たちは、これらの取り組みを通して、最先端の看護研究と、社会実装の両軸を持ち、誰もが「しあわせ」と感じられるような社会を実現できる地域づくりに貢献していきたいと考えています。

ご寄付のお願い

東京大学基金のひとつであるグローバルナースリサーチセンター基金 (<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt91>) にお寄せいただくご寄付は、その一部を目白台 GNRC オープンスペースの内装やここでご紹介した活動のキックオフに使用させていただく予定です。

ご寄付を常時受け付けておりますので、ご支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



財団レポート

熟達化に経験が果たす役割とその拡張

静岡大学 情報学部
講師 石川翔吾
楠田(小山田)理佳

1. 熟達化における経験

経験は実践知を育みケアの熟達化の質を高める非常に重要な身体的・心的活動です。経験学習はケアに限らず、生涯学習という視点であらゆる領域において欠かせません。熟達化とは、単に定型的な仕事を卒なくこなすことだけでなく、状況に応じて適切な対応をしながら、想像的に振る舞うことのできるレベルになることです。そのため、特に社会人に気づきを与えるような教育介入において、この経験の質を高めることは大きな課題となっています。本稿では、この経験の役割について改めて考えてみたいと思います。

本題に入る前に、経験について整理しておきます。本稿で扱う経験は、単に職業上の経験だけではなく、人が生涯を通して得る多種多様な経験、広い意味の定義で扱います。我々の生活上の経験と職業上の経験は綺麗に切り離されるものではなく、相互に強く関連しています。今回ご報告する内容には、そのようなことを示唆する結果も含まれています。

2. 経験の作用

昨年度、グループワークにおける経験と知識の関係 [1] についてご報告しましたが、本稿の主題に関係しますので、経験の作用という切り口で整理してみます。この研究では、学習者がテーマに関する最低限の知識、及びお互いに関連する経験があることによってはじめて学習に繋がることや、経験やどのように実践するかということが疑問の解決につながるものがペアの対話の中から観測され、経験は協調的な学習活動において重要なファクターであることが示されました。この研究では、経験が学習の促進因子として有効であり、経験と知識の関係をポジティブに結びつけています。

表1のように経験を有していない人（非医療者）でも、間接的にペアの人の医療現場での経験を聞くことで自身の環境に当てはめて、表1の2で質問をしたり、5で疑問を述べたりして理解を深めていくことができることも興味深いポイントです。一方、経験のない人同士のペアでは疑問が解消されず、雑談として脱線する傾向があったことも経験が学習の促進因子であることを支援する結果となりました。

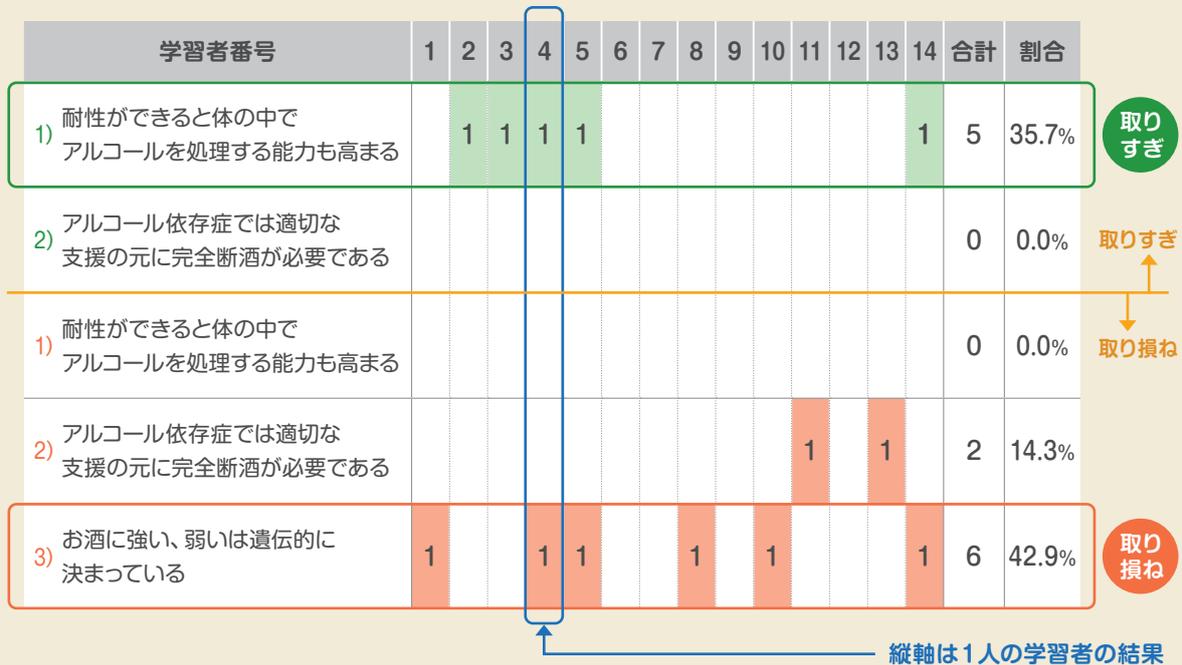
表1 — 談話分析に基づく対話の流れ：
医療者の経験を通して非医療者のせん妄状態に関する理解が深まる様子

対話の流れ	非医療者	医療者
1		自身の経験の共有
2	質問	
3		自身の知識の共有
4		深堀
5	疑問	
6		リアクション
7		自身の経験の共有

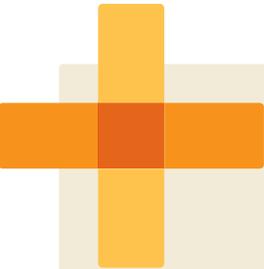
3. 経験の副作用？

今回は、別の研究について紹介します。この研究 [2] では、多肢選択式（回答として複数の選択肢を選ぶ）のオンラインテストの分析によって特定の選択肢が多くの学習者に誤って選択されたり、正解にもかかわらず選択されなかったりしていたことを分析しました。多肢選択式問題は、例えば、「・・・6)60歳定年後は悠々自適の生活を送っている。7)ときどき二日酔いのために朝から迎え酒をしていることがあるという・・・」のケースを提示し、「アルコール依存症を疑う記述を指摘してください。」の問いで“6)のようにケースの一文の先頭にある数字を選択する問題や、単に質問と回答のセットで提示される問題が組み合わされて設計されています。このような問題によって、ケースから重要な箇所を読み取り、どのように解釈する必要があるのかを客観的に把握することが可能になります。典型的なパターンを図1に示します。この図では、医師の模範解答に対して、模範解答にない文章を選択したものを「取りすぎ」、模範解答にあるが選択していないものを「取り損ね」と表現しており、一人ひとりの結果を可視化しています。

図1 | 多肢選択式問題における解答傾向の可視化



このような解答のパターンを分析すると、生活上のさまざまな経験で得られた常識的な知識が思い込みのような形で新しい知識を習得することを阻害している様子や、知識が十分に身に付いていない場合は語感や言葉の関連性など一般的な常識的知識を使って類推している様子が観測できました。取りすぎが多い選択肢を見てみると、アルコール依存症に関する問題や、精神障害、せん妄、妄想に関わる問題の選



択肢が多かったです。一方、取り損ねが多い選択肢は知識を問う問題の選択肢が多く確認されました。

このような誤った知識は適切な知識に置き換えることが必要ですが、思い込みとも言える誤りは自分で気づくことが難しいため、正しい知識で置き換える知識の再構築には学習の提供側による教育介入が有効であることもわかりました。特定の選択肢が多く学習者に誤って選択されたり正解にもかかわらず選択されなかったりするという着目点は、学習者が誤りやすいテーマを抽出して学習者に気づきを与えることができるため、教材や教授方法の改善にも生かすことができます。

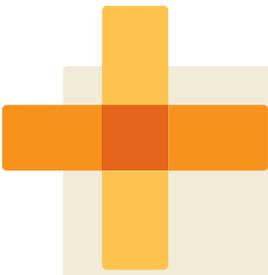
経験学習においては、固定観念に捉われず、文脈に応じて改善していくことのできる能力を育むことが重要であることが指摘されていますが [3]、一方で、我々の思考は学習で知識を固定化することによって効率的に物事を捉えることができるように設計されているため、前述したように人生経験で得た思い込みのような固定化が勝ってしまう場合があります。すなわち、私たちが人生を歩いていく上で学習することと、職業上の学習は同じ学習の基盤の上に融合されて成り立っていることを前提として学習環境やコンテンツを設計することが重要であることを示唆しています。

これまで、経験が学習にとってどのように作用するのか、また学習を阻害することがある場合、どのような状況で生じるのかをみてきました。経験学習を学習理論として確立したコルブは、具体的経験、省察的観察、抽象的概念化、能動的実験のサイクルを示しました [4]。コルブの示した経験学習は具体的経験が起点となっています。すなわち、経験がなければサイクルが回らず成長することができないことを意味します。そこで、最後の節では経験を意図的に作り出す方法について述べたいと思います。

4. 経験の拡張へ

経験は偶発的なものであり実践環境によって作られるものです。質の高い経験は、単にその場に身を置くことではなく、問題を認識し、解決のために試行錯誤することが重要です。また、実践者が置かれた状況で適切な教育介入をしていくことも実践知の獲得には重要であることも指摘されています [3]。しかし、全員がそのような質の高い経験の中で指導を受けることは難しく、それが熟達化の差にも大きく影響していると考えられます。

そのため、新たな経験の場を構築していく取り組みも重要です。看護のシミュレーション教育やペーパー・ペイシエントを使ったケース検討、ロールプレイングは、経験の場を作る教育システムとして現在でも多く実施されています。さらに、近年はこのようなシミュレーション教育を360°映像やVR空間で体験する動きが活発化しています [5]。最近 Virtual Reality は実質空間と訳されるようになってきており、VR空間内での体験は「ほぼ実体験」であることを示す研究も多くあります。



我々も360°映像視聴時の看護師の視線情報を取得して、熟達者の視線の使い方と新人レベルの視線の使い方の差を評価した研究を進めています [6]。図2は、没入型映像を視聴している際の視線の使い方を可視化した結果です。このような可視化によって、熟達者がどのように対象者や環境を観察し重要な情報を取捨選択しているかがわかります。例えば、熟達者は全身の状態や患者さんの視線の先の確認をしながらバランスよく観察しますが、初学者は患者さんの顔辺りに視線が集中する特徴がみられました。

今後、このような新たな学びの場が、経験を拡張し、熟達化のスピードを加速させることにつながる事が予想されます。これから、オレンジクロス財団とはVRに関する研究を推進していきますので、結果をぜひご期待ください。

図2 | せん妄状態の人の行動を観察する学習者の視線情報の可視化



【参考文献】

- [1] 楠田 (小山田) 理佳, 石川翔吾, 神谷直輝, 小林美亜, 上野秀樹, 村上佑順, 桐山伸也: オンラインペアワーク場面を対象とした談話分析に基づく経験の知識獲得に及ぼす影響の評価, 情報処理学会論文誌教育とコンピュータ (TCE), Vol.8, No.2, pp.12-24, 2022.
- [2] 楠田 (小山田) 理佳, 石川翔吾, 上野秀樹, 園田薫, 村上佑順, 桐山伸也: 認知症の医学的原因理解度評価のための介護従事者の学習の分析, 研究報告高齢社会デザイン (ASD), 2023-ASD-26(1), 2023.
- [3] Benner, P., Sutphen, M., Leonard, V. and Day, L.: ベナー ナースを育てる, 医学書院, 2011.
- [4] Kolb, DA.: Experiential learning: Experience as the source of learning and development, FT Press, 1983.
- [5] Pirker, J. and Dengel, A.: The Potential of 360° Virtual Reality Videos and Real VR for Education—A Literature Review, IEEE Computer Graphics and Applications, 41(4), pp. 76-89, 2021.
- [6] Nguyen, G., Ishikawa, S., Ito, M. and Kobayashi, M.: Evaluating Observation Skill in Nursing Education through Gaze-based Objective Assessment in Immersive Simulation, Proc. of IEEE International Symposium on Mixed and Augmented Reality Adjunct, pp.271-275, 2023.

第9回オレンジクロスシンポジウム

—2023年7月13日(木) オンライン開催—

テーマ：コンパッションに支えられるまちを考える

【シンポジウム概要】

本シンポジウムでは、昨年に続き、生老病死をめぐる苦難や苦悩等により、人間がもつ「コンパッション」を通して具体的なアクションに結びつく、「コンパッションに支えられるまち」を考えました。

第1部は、2021年度から、慶應義塾大学大学院教授の堀田聡子先生に取り組んでいただいている「コンパッションに満ちたまち」検討事業（CC研究 [注]）により、新型コロナウイルス感染症×介護を手がかりに、フィールドワークを実行して介護職員等の語りを蓄積しています。

その成果をもとに、新型コロナのクラスターを複数回経験した介護施設の職員および関係者の語りを収集・蓄積し、職員と入居者、同僚、家族、地域との「間」に生まれたものについて検討・分析をした結果の報告を中心にご講演がありました。

第2部は、講師の方々から日頃の実行されている活動を通して、誰もが抱える弱さや苦手なこと、困難なことを、コミュニティのなかでの支えあいや学びあいによって克服されている状況を、講師の方々にご講演いただきました。

"We already care for each other, we already know we have compassion." は、インド・ケララ州で長年にわたりコミュニティを基盤とする緩和ケアを推進するクマール医師の言葉です。私たち一人ひとりのなかにあるコンパッションや住民のコンパッションに満ちたコミュニティの様子をご講演者の方々から学ぶことができました。

その後のディスカッションでは、ご講演者がお互いの活動について興味をもったことなどについて、質疑応答しながら進行し、より深くコミュニティのなかでの支えあいを理解することができました。

【講演者・講演テーマ(講演順)】

○ 第1部 コロナ禍におけるケアの揺らぎ—クラスター対応をめぐる介護施設職員の語りから

演者：島藺洋介氏（大阪大学グローバルイニシアティブ機構 講師）

堀田聡子氏（慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 教授）

○ 第2部 生老病死を地域住民の手に取り戻そう—コミュニティでの支え合いに向けたチャレンジ

演者：藤岡聡子氏（ほっちのロッジ 共同代表・福祉環境設計士） 森祐美子氏（認定特定非営利活動法人こまちぶらす 理事長）

宮田隼氏（コミュニティハウスひとのま 代表）

池野優真氏（コミュニティナースカンパニー インターン）

進行：藤岡聡子氏・堀田聡子氏

ご講演後にディスカッション。

注. 【Compassionate Communities について】

パブリックヘルスと緩和ケアにかかわる潮流が融合して Allan Kellehear 教授らにより提唱されたもので、次のような中心的概念からなるものです。

（"Compassionate cities: Public Health and End-of-Life care", Routledge, 2005）。

Compassion (cum (together) + patio (suffering)) は健康への倫理的要請である。疾病・障害・喪失があってもなお、健康とはポジティブな概念である。

Compassion は全人的/生態学的なアイデアである。

Compassion は喪失の普遍性と関連する。

「死にゆくこと (dying)」「死 (death)」「喪失 (loss)」の普遍性に焦点をあて、コミュニティのあらゆる場で「生老病死を地域住民の手に取り戻す」アクションサイクルにつなげる実践が生まれており、Public Health Palliative Care International が、そのネットワークとナレッジ共有のプラットフォームとなっています。

想像してみよう。

コミュニティでは、そのメンバーの健康と社会的ウェルビーイングが気にかけられている。

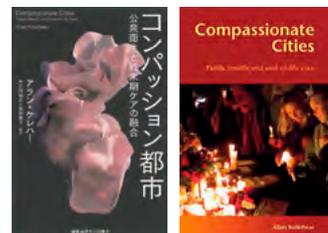
また想像してみよう。

その気づかい (care) は、コミュニティの一人ひとり (everyone) が経験する死にゆくこと (dying)、死 (death)、喪失 (loss) に及んでいる。

さらに想像してみよう。

ここで「死」の理解は、たんに身体の死にとどまらず、アイデンティティの死や帰属の死を含んでいる。これらの死は、認知症や性的虐待の後遺症とともに生きる人々、また所有権を奪われた先住民や難民が経験しているものだ。

—アラン・ケレハー『コンパッション都市 公衆衛生と終末期ケアの融合』はじめに
<https://www.keio-up.co.jp/np/isbn/9784766428261/>



第9回シンポジウム第2部ご登壇者プロフィール

■ 池野優真さん

埼玉県さいたま市出身。N 高等学校在学中、Community Nurse Company 株式会社でインターン活動中。2022年に God Hands プロジェクトに参加し、雲南市で活動中のコミュニティナースを体験する。その時、学生のうちからコミュニティナースを知ることはいずれからのキャリアや将来を考える上で重要なのではないかと感じ、2023年2月から雲南市へ移住し、いま出雲にある拠点「ユース出雲」や雲南にある拠点「みんなのお家」で、ユース世代の自分にだけできるコミュニティナースングを実践真々最中!!

■ 藤岡聡子さん

1985年徳島県生まれ三重県育ち。夜間定時制高校出身。人材教育会社を経て24才で介護ベンチャー創業メンバーとして有料老人ホーム創業。「なんで老人ホームには老人しかいないの?」を元に、アーティスト、大学生らと町に開いた居場所づくりを試みる。2015年デンマークに留学、幼児教育・高齢者住宅の視察、民主主義形成について国会議員らと意見交換を重ね帰国。その後東京都豊島区の元空き家をリノベーションしたゲストハウスにて「長崎二丁目家庭科室」を主宰、老若男女1000人以上が訪れた。2019年長野県軽井沢町にて「診療所と大きな台所があるところ ほっちのロッジ」を立ち上げ医師と共に共同代表に。表彰歴に第10回アジア太平洋地域・高齢者ケアイノベーションアワード2022 Social Engagement program 部門で日本初のグランプリ受賞、同年グッドデザイン賞2022受賞 / 審査員の一品にも特別選出。共著に『ケアとまちづくり、ときどきアート (2020 中外医学社)』『社会的処方 (2020 学芸出版社)』。

■ 宮田隼さん

富山県高岡市にて『コミュニティハウスひとのま』という名前で一軒家を借りて「誰でも来ていいよ」という活動をしています。自分の家とまでは言えなくても、結構話が分かる親戚の家くらいの場所になればと思っています。開放して10年になるのですが、不登校、ひきこもり、生活困窮者、刑務所からの出所者、DV 被害者など、いわゆる社会問題として取り上げられがちな人たちとも多く接してきました。そのような声に「支援」という形で接するのではなく「お友達」くらいの感覚で、もちろん僕が助ける時もあるのですが、時には逆に助けられることも普通にあるような関係性をつくっていきたくらいな思いながら日々生きてます。

■ 森祐美子さん

慶應義塾大学卒業、トヨタ自動車株式会社にて海外営業、海外調査に従事。第一子出産直後に感じた育児における孤独感やその後救われた経験から2012年にママ友数人と「こまちぶらす」を立ち上げる。現在約270人の登録ボランティアメンバーと約50人のスタッフと「こまちカフェ」「こよりどうカフェ」や様々な企業との協働プロジェクトを運営。2019年米フィッシュファミリー財団チャンピオン・オブ・チェンジ日本大賞にて受賞。



調査目的

「コンパッションに満ちたまち」の先進事例のひとつといわれるインド・ケララで、診断名・年齢・社会階層にかかわらず不治の病、寝たきり、死にゆく患者の問題に、地域コミュニティが参画する医療サービス提供により対応する緩和ケアの仕組みである「ケララモデル」の理念と実践について学ぶこと(2023年3月6日～7日)を主たる目的として、地域・在宅ケア、まちづくりに携わる関係者を訪ねた。

調査実施者

- ・紅谷浩之(医師、医療法人社団オレンジ 代表)
- ・藤岡聡子(福祉環境設計士、株式会社 ReDo 代表取締役、医療法人社団オレンジ 副代表)
- ・堀田聡子(慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授)

医療法人社団オレンジより西出真悟(ソーシャルワーカー)、菊池郁希(看護師)、木下克俊(臨床宗教師)

社会福祉法人福祉楽団より飯田大輔(理事長、介護福祉士・社会福祉士)

調査スケジュール

日程	訪問先
2023年3月6日(月)	Institute of Palliative Medicine(IPM) ケララモデル
3月7日(火)	同上
3月9日(木)	CARE 24
//	Squareworks_Shroffs Foundation Trust (SFT)

2023年3月インド視察報告書 1ページ目、2ページ目

【シンポジウム動画・資料】

シンポジウム動画、各ご講演者の当日資料は右に掲載してあります。 <https://www.orangecross.or.jp/seminar/index.php>
「インド視察報告書」も右に掲載しましたので、ぜひ、ご覧ください。 <https://www.orangecross.or.jp/project/index.php>

【文責: オレンジクロス】

【演題】WHO 健康都市とコンパッションコミュニティの台頭 ～パブリックヘルスに求められる今後の変革～

場所: Global Business Hub Tokyo (大手町フィナンシャルシティ グランキューブ3階)



● 講演者

アラン・ケレハー氏

| 米国バーモント大学臨床教授

逐次通訳: 重松加代子氏



● ファシリテーター

堀田聡子氏

慶應義塾大学大学院

健康マネジメント研究科 教授 /

日本医療政策機構 理事

【セミナー概要】

今回、日本医療政策機構（HGPI: Health and Global Policy Institute）と共同でコンパッションコミュニティについて、その第一人者であるアラン・ケレハー先生をお招きしご講演いただきました。

『コンパッションコミュニティ / 都市の概念と関連するグローバルな政策は、どのような背景から生まれてきたのか。21世紀の疫学、パブリックヘルス（公衆衛生）政策の発展と現在の市民・社会の変化において、なぜコンパッションコミュニティの概念が重要なのか』を事前の課題認識としてご講演をお聞きしました。

今回のセミナーでは、まず、現状の国際的な緩和ケアや世界保健機関（WHO: World Health Organization）が進めるパブリックヘルスの体制・サービス提供の限界についての話がありました。続いて健康都市・コンパッション都市の中心概念やコンパッション都市の特徴などに触れられ、その後、コンパッション都市実現のための戦略や実践原則、各国で興隆しているコンパッション都市の動向、国際的に進展している様々な取組みの紹介へと講演は進みました。

いったん当日資料にそったアラン先生の話が終わり、ファシリテーターである堀田先生の速やかな整理と滑らかな進行のもと質疑応答に移りました。参加者からの質問により抱えている悩み・葛藤などの課題が参加者の間で共有されました。それらの質問に対してアラン先生から、永年の研究成果・実践活動を踏まえた的確で説得力のあるアドバイスがいくつも提示されました。

2時間のセミナーでしたが、アラン先生の簡潔で示唆に富むお話やアドバイスにより、ご出席のみなさんとともに濃密で有意義な時間を共有することができました。

重松加代子さんの正確でわかりやすく、同時にアラン先生の意をくんだ通訳はプロの技でした。その美しい日本語にも魅了されました。

【文責: オレンジクロス】

プロフィール

アラン・ケレハー氏(米国バーモント大学臨床教授)

米国バーモント大学臨床教授。専門はパブリックヘルスとエンドオブライフケア。オーストラリア・ニューサウスウェールズ大学で社会学の博士号(Ph.D.)を取得。同国ラトロープ大学教授、東京大学客員教授、英国バース大学教授、カナダ・ダルハウジー大学教授、英国ミドルセックス大学教授、英国ブラッドフォード大学教授を歴任。英国社会科学アカデミーフェロー(FAcSS)。

堀田 聡子氏

(慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科 教授 / 日本医療政策機構 理事)

東京大学社会科学研究所特任准教授、コトレヒト大学訪問教授等を経て現職。博士(国際公共政策)。アラン・ケレハー著(2022)『コンパッション都市—公衆衛生と終末期ケアの融合』慶應義塾大学出版会を共監訳。社会保障審議会・介護給付費分科会及び福祉部会等において委員。

セミナー当日の動画（質疑応答を除く）は弊財団ホームページに掲載しています。

（以下にアクセス後、日本医療政策機構のサイトへ移動します）ぜひ、ご覧ください。

<https://www.orangecross.or.jp/seminar/index.php>

第10回

看護・介護 エピソードコンテスト

テーマ「伝えたい！わたしの看護・介護エピソード」

応募
期間

2023.12.1(金) ▶▶▶ 2024.3.31(日)

(郵送の場合は当日の消印まで有効)

公表

弊財団ホームページおよび広報誌上にて
各賞を受賞された方、受賞作品を公表します。

選考委員



秋山正子氏

暮らしの保健室 室長
認定 NPO 法人 マギーズ東京
センター長
(第47回フローレンス・ナイチンゲール記事受章)



川名佐貴子氏

編集者、ライター

選考
委員長



溝尾朗氏

患者目線のクリニック
虎ノ門内科・皮膚科院長

賞・副賞



大賞
(1編) 30万円



優秀賞
(3編) 10万円



選考委員
特別賞(5編) 5万円



理事長賞
(25編) 3万円

応募資格 日本国内で看護・介護に携わっている方(ご家族等の看護・介護をされている個人、職業で看護・介護をされている方を問いません)

応募方法 WEB応募フォームまたは郵送によりご応募ください。

作品の
形式

400字以上2400字以内(タイトル含まず)、
A4サイズのテキスト形式のファイル(Word形式またはPages形式)※手書き不可

WEBから
応募

応募フォームにアクセスして必要事項を入力の上、応募作品を添付して送信してください。
スマートフォンなどでファイルが作成できない場合は、
応募フォームの『テキスト直接入力』欄にエピソード本文を直接入力してください。

応募フォーム <https://business.form-mailer.jp/fms/c3dedbc7215941>

応募
フォー
ム



郵送で
応募

応募作品には作品タイトルと氏名を明記してください。
専用の応募用紙またはA4サイズの用紙に必要事項を記入し、作品とともに下記宛先までお送りください。
専用の応募用紙は弊財団ホームページよりダウンロードできますのでご利用ください。

- 必要事項
- 1 作品タイトル(フリガナ)
 - 2 氏名(フリガナ)
 - 3 年齢
 - 4 郵便番号
 - 5 住所
 - 6 電話番号
 - 7 メールアドレス
 - 8 職業または職種
 - 9 過去の応募経験(あり/なし)
 - 10 コンテストを知ったきっかけ
 - 11 応募要項に同意のうえ応募していますか?(同意する場合は「はい」と記入してください。)
 - 12 保護者氏名
 - 13 保護者連絡先(TEL・E-mail)
 - 14 保護者の方も応募要項に同意のうえ応募していますか?(同意する場合は「はい」と記入してください)
- 応募者が未成年(18歳未満)の場合

応募先・お問い合わせ 〒104-0031 東京都中央区京橋 2-12-11 杉山ビル 6F 一般財団法人オレンジクロス「看護・介護エピソードコンテスト」係
info@orangecross.or.jp (弊財団は在宅勤務を行っておりますのでメールにてご照会ください)

【注意】応募要項、個人情報・著作権の取扱い、その他注意事項等について、弊財団ホームページで必ずご確認のうえご応募ください。
(<https://www.orangecross.or.jp/contest/index.php>)



一般財団法人オレンジクロス 賛助会員募集のご案内

一般財団法人オレンジクロスの活動趣旨・取り組みにご賛同いただける個人・法人の賛助会員を広く募集しています。

● 賛助会員年会費：個人会員（1口）10,000円 法人会員（1口）100,000円

● 期 間：毎年7月1日～翌年6月末日

● 賛助会員特典：① 各種情報提供
② 広報誌の配布
③ 各種セミナーの無料・優先招待

● 申し込み方法：弊財団ホームページ (<https://www.orangecross.or.jp>)
「賛助会員について」から申込書をダウンロードしてください。
メールに申込書を添付して info@orangecross.or.jp まで
お送りいただくか、FAX または郵送でお申込みください。

法人賛助会員	URL
株式会社コスモスケアサービス	https://www.cosmos-group.co.jp/care
社会福祉法人 新生会	https://www.sun-village.jp/
株式会社ツクイ	https://www.tsukui.net
株式会社デベロ	https://develo-group.co.jp
日本生活協同組合連合会	——
株式会社やさしい手	https://www.yasashiite.com

(2024年2月1日現在)



広報誌 オレンジクロス | 春号 2024 SPRING VOL.16 | 2024年2月1日発行

発行：一般財団法人オレンジクロス

〒104-0031 東京都中央区京橋2-12-11 杉山ビル6階 TEL. 03-6228-7216

<https://www.orangecross.or.jp/>



本誌は、「植物油インキ」「水なし印刷」
を採用した環境にやさしい印刷物です。